

第1回 沖縄の酒類製造業の振興策に関する検討会 議事要旨

1. 日時：平成29年4月25日（火）15:00～16:30

2. 会場：中央合同庁舎8号館5階共用C会議室

3. 出席者：

小泉 武夫	東京農業大学名誉教授（座長）
下地 芳郎	琉球大学教授
出口 尚	経済アナリスト・前（株）南島酒販代表取締役社長
長谷川 浩一	（株）はせがわ酒店代表取締役社長
浜野 京	信州大学理事（内閣府知的財産戦略推進事務局政策参与）
安田 正昭	琉球大学名誉教授
結城 摂子	マンダリン工房・フードコーディネーター
渡邊 賢一	（一社）元気ジャパン代表理事

【国及び県】

梶谷 裕司	内閣府沖縄振興局長
古谷 雅彦	内閣府大臣官房審議官
安藤 年式	内閣府沖縄振興局調査金融担当参事官
増田 義一	内閣府知的財産戦略推進事務局次長
佐久田 忍	内閣府沖縄総合事務局総務部振興企画官 (能登 沖縄総合事務局長 代理)
田村 公一	国税庁酒税課長 (山名 国税庁長官官房審議官 代理)
谷口 裕之	沖縄国税事務所長
伊集 直哉	沖縄県商工労働部産業雇用統括監 (屋比久 沖縄県商工労働部長 代理)

【オブザーバー】

新崎 康	沖縄振興開発金融公庫融資第二部長
玉那覇美佐子	沖縄県酒造組合会長
土屋 信賢	沖縄県酒造組合専務理事
大城 勤	沖縄県酒造協同組合理事長

【ヒアリング酒造所】

佐久本 学	瑞泉酒造（株）代表取締役社長
中里 迅志	（有）神村酒造 代表取締役専務

4. 議事概要

○座長挨拶、検討員紹介

事務局から検討員の紹介があり、座長に小泉検討員が指名された。

○泡盛業界の現状・課題及びこれまでの振興策等

資料1及び資料2に基づき、内閣府沖縄振興局、沖縄県商工労働部及び沖縄県酒造組合から説明があった。

○泡盛業界の経営に関する現状と課題

資料3に基づき、沖縄振興開発金融公庫から説明があった。

○酒造所からのヒアリング

瑞泉酒造(株)佐久本社長及び(有)神村酒造中里専務から説明があった。

○意見交換

検討員から、以下の通り意見があった。

- ・ 泡盛業界がやろうとしていることは、これまで日本酒やウイスキー業界が通ってきた道と同じ。古酒については販売の工夫が必要。泡盛のにおいて個性として売ってほしい。
- ・ 海外のトップシェフに泡盛を紹介すると「日本にはこんなに使える酒があるのか」と驚かれる。料理に合うお酒のリスト化も大事。泡盛は日本酒と違い輸送時の温度管理が必要なく、ドライコンテナの船便で問題なく輸出できることも利点。日本の基準(合や升)と世界の基準との整理が必要。
- ・ 泡盛は日本でしか作れないお酒。若い人にアピールするため、例えばジヤズのビートとペアリングなど、立体的な売り方を検討すべき。ラム酒が世界の5大酒になったように泡盛にも「物語性」が重要。
- ・ この検討会では、①国、県及び泡盛業界が一体となって「緊急対策プラン」を検討し、実行すること、②マーケットの拡大に向け、これまでの沖縄県酒造組合を通じた一律的な取組から、やる気のある事業者への「選択と集中」を行うこと、③経営力の強化につなげるため、泡盛製造業の経営実態を明らかにすること、を論点としてはどうか。
- ・ 海外展開に向け一刻も早くアクションを起こすこと。どうプロモーションし、どの国をターゲットとするかが課題。インフルエンサーに泡盛の情報が届いていない。まずは泡盛を飲んでもらうきっかけ作りから取り組んではどうか。例えば、インバウンド客に向けた空港でのイベント、ワゴンでの販売、ホテルでウエルカムドリンクの提供等。泡盛のおいしい「飲み方」の提案も必要。予算をかけずにできる取組はある。
- ・ これまでの泡盛のプロモーションには、継続性がないなど課題が多く、補助金を効果的に使ってほしい。泡盛カクテル「58KACHA-SEA」は、海外ではゴーヤが手に入らない。世界に通じる泡盛カクテルであれば、飲ませやすいことが必要。販路拡大策を沖縄県全体で考えていくべき。
- ・ 黒麹菌を用いた琉球泡盛は重要な食文化。発酵の副産物として、もろみ

酢がある。ラフテー、豆腐よう、辛味調味料なども含め、総合的な琉球の食文化である。これらを世界遺産に登録しようと考えている。

- ヨーロッパの方は沖縄が大好き。その理由は、沖縄にはゆったりした時間が流れていること、さらに御嶽など独自の精神的な文化があること。そういうものと合わせて考えてほしい。

以上